

(史料紹介)

「官遊紀勝」について

一

江戸時代中期以降、主に江戸在住の学者や文人が地方へ赴いての日記や紀行文が多く著されているが、そのうち甲州に関するものも、すでに『甲斐志料集成』や『甲斐叢書』の紀行文編に収録されているものだけでも十数種に及び、中には荻生徂徠の『峡中紀行』や『風流使者記』のように、両叢書に収録されてかなり便利に利用されてきたものが少なからずある。これらの紀行文類は、その筆者にもよるが、押しなべて散文的かつ主観的なものであり、観察記事が中心であるので、史料的には一等史料とはいえず、二次的な利用のされ方をしているのが一般的である。

しかし、近代とりわけ第二次大戦後の急激な開発によって、地方の様相は一変してしまい、最早、十年前の景観の復元や保存も困難な状況にある。そうした中であって古い写真の史料性が重要視されているわけであるが、そうした写真技術のなかった前近代に関して

柴 辻 俊 六

は、文学や絵画資料によるほかはないのである。

ここに紹介する「官遊紀勝」もそうした時期の紀行文の一種であって、従来全く知られていなかった点と、記述内容と挿絵が大変リアルであって、従来紹介されている紀行文類に比して、優るとも劣らないものと判断して、敢えて紹介の労をとった次第である。最初にこの書物の存在を知らせていただいたのは、早稲田大学助教授の外園豊基氏であって、昨年度一年間の国外留学として米国のプリンストン大学で過ごされた際、ニューヨークのパブリック・ライブラリーでの調査の折に「官遊紀勝」八冊と題する和綴本の中に、甲州関係の記事が多見していたことを連絡していただいた。因に氏のメモした同書の奥書には「右官遊紀勝八巻者、法眼長伯奉台命、遊于甲州紀也、乞而摹之、文化十三年乙亥十月、直曲庵主人」と記されていた。これによれば、同書は、文化十二年（一八一五年）に直曲庵主人という人物が書写した写本であったことが明らかとなる。因に全く同様の書名と奥書をもつ八冊本が内閣文庫に所蔵されており、他

に同内容の「江君確亭紀行」の書名を持つ三冊本も同文庫に所蔵されていることから、この写本自体が何回か転写され一部ではかなり流布していたことを物語っている。

二

岩波書店発行の『国書総目録』によれば「江君確亭紀行」として、国会図書館、旧教育大、尊経閣文庫、旧浅野文庫のほか、内閣文庫に二種が所蔵されており、別書名として「官遊紀勝」、「甲府紀行」ともいい、著者は渋江虬（長伯）であるという。まず、著者についてみておくと、各種の人名辞典にその名を確認できるから、かなりの著名人であったようである。それらによると、江戸中期の本草家で、宝暦十年（一七六〇）に太田惟長の四男に生れ、渋江陳胤の養子となり、安永八年（一七七九）に初めて將軍家治に謁見し、寛政五年（一七九三）に奥詰となり、菜園を預る。寛政十一年（一七九九）幕命により薩摩藩の曾榮士攷と蝦夷地へ赴き、草木を採集して『蝦夷草木志料』を著す。その他、『蝦夷紀行』や『東遊紀勝』も著すとあるが、晩年のことは明らかでない。いずれにしても幕臣として菜園御用を勤めていた本草学者ということになる。

ここに紹介するものは、内閣文庫所蔵本のうち、「官遊紀勝」との題箋をもつ八冊本であり、前述したようにこれは写本の一冊である。これらの諸本の原本となったものの存在は、現在のところ確認できていないが、内閣文庫所蔵の八冊本は、非常に丁寧に写された良質のもので、挿絵にも一部が着色されており原本に近いものと判断される。八冊本の構成は、

卷一 序文・峡中行

卷二 遊蕪崎記（文化十二年書写の奥書あり）

卷三～五 遊御嶽記 上、中、下

卷六 峡中行（門人源惟徳の奥書あり）

卷七 酒折湯嶋記

卷八 岩堂記

となっており、この写本は巻次の編成に若干の前後があるようであるが、巻一の序文は、文化七年（一八一〇）に『徳川実紀』の編者のひとりであった成島司直が書いたものであり、本書の成立経過と著者の渋江長伯の紹介とをしている。それによると、年代は明らかではないが、著者が幕命をうけて甲相駿豆の諸州を廻った後にこの書をまとめて序文を求めてきたとあるので、本書の成立はこの序文の時と考えてよく、記述されている紀行の内容はそれを遡ること数年前の状況をまとめたものと考えてよいであろう。

前述したように、著者の渋江長伯は本業が幕府御抱えの本草学者であったから、幕命の内容もおそらく本業に関連した薬草等の調査にあつたと思われ、こうした地方の観察記録を書くことは、いわば余業であつたわけである。丁度、この頃の甲斐国内では、文化三年（一八〇六）に甲府勤番頭の松平定能が幕命をうけて、甲斐国内の地誌書をまとめ始めた時期であつて、後にそれが『甲斐国志』として幕府に提出されている。そうした時期に渋江氏が甲斐国内を巡遊してこうした紀行文をまとめたのは、偶然の一致であつたかも知れないが、同時期の正規な地誌書を補完する記録として、その価値を有するといえよう。

全八冊の内容については、改めてその全文を紹介する機会を得たいと思うが、ここでは概報として、その記事と挿絵の一部を紹介しておきたい。巻七の「酒折湯嶋記」の冒頭の部分には、以下のようになっている。この紀行文全体がこういった調子の記述であり、全八冊の割には記述部分が少なく、挿絵がかなりの部分を占めている。

るのが特徴である。

酒折湯嶋記

九月九日 龍山登高の日にもあれば、諸子とともに山八幡に至る。左り小池あり橋を隔て辨才天あり、一條町の通に向て石坂あり、坂を上り八幡宮なり、拝殿は長屋の如し、境内に杉の大木あり、一本にして五六尺も上り三またになり森々たり、廻り八四かゝへもあら

「官遊紀勝」酒折湯嶋記 の記事と挿絵



西園

先月より訪ふ意高の日は、
 猶子とてに山ノ隅に坐る。小池
 あり橋と隔て、每才天あり一條、可道
 小向て石阪あり、垣とてよりハ幡宮あり
 并殿ハ其所の如く境内ハ杉木茂り

ん、開運稲荷の山皆大石にて立木生茂りたり、此山にハ葉の薄く志をての葉に似たる□□^{あり}あり、芋葉の大茯苓とも似て刺あるもの也、水引草の長葉にて厚きも只大石の多きのみ、夫より亦穂積の地蔵に至る、入口松並木、左り山きしに石地藏甚た多し、堂の額に當國開關穂積地藏とあり、左りの方小屋の内にある石地藏人よりも大なるか繩にて幾重も縛りてあり、其次なるハ口に味噌をぬりてあり、堂の前後地藏の数ハはかりなし、石山を折廻りて上りたる上に大石あり、それを又地藏に作りたる石の背に宝永四年造焉長二丈八尺七寸六分と割みあり、畑道を行て善光寺の本堂の側に出ず、堂も至て大なる作りなり、信州の善光寺のまゝ写したるといへり、信玄の時代信州より如来の真物を取寄せ、本体は甲州の善光寺に留めて別に造りたるを信州に納たりと云傳ふ、山門などもありて惣門より本堂迄ハ長く山門の手に頼朝頼家實朝の木像あり、實朝の像ハ損したる

由にて出し置ず、頼朝の像ハ人の座したる位にて生るか如し、山門より左り畑道を七八町も行ハ石碑あり、玉諸明神とあり鳥居もあり、石山にて麓より社迄十二町となり、此日ハ一年に壹度づつ所の者登山の日なり、夫故老若等詣もあれハ登山するもいかゞならんと右手の方麓の細道を過て酒折の宮に至る、宮居はさひたれ共、古の姿を思いやれば尊くも仰けり、土人ハ酒折天神と唱へる故天神の間違にて手習子供の大文字など多く一厄と云ふへし、右りの方に石碑あり、山縣大二の文なり、書は甲府の人の書たるよし、其祝司飯田大藏の家に日本武尊の火打袋を伝へ持たるといふ、多賀醉雪画も工なれハ行てその形を乞ひ写して来れり、日本武尊の物なるや否ハ知らず、形ハ古きものなり、祝司のいへる倭姫命の縫たる物なりと、

酒折祠碑（以下略）

（市史編さん専門委員）